

平成28年度

一般財団法人

**新潟県建設技術センター研究助成事業
活動報告書**

**～天王川の自然再生に伴う維持管理
の枠組みづくりに関する活動～**

新潟県佐渡地域振興局地域整備部

天王川の自然再生に伴う維持管理の枠組みづくりに関する活動報告

1. 本活動の背景

新潟県佐渡地域振興局地域整備部では現在、トキの野生復帰を川づくりの面から支援するため、二級河川天王川において自然再生事業に取り組んでいる。

その計画づくりや整備後の維持管理のあり方については、地域の住民や団体との話し合いを進めているほか、アドバイザーとなっている6名の専門家からは、治水・環境・鳥類・生物多様性等の専門的見地からの意見をいただき計画に反映しているところである。

この自然再生の取組は、約5kmの天王川のうち、最下流部から約2km地点の中流部において、コンクリート護岸の直線的な川を土や石積みを用いた護岸にしながら蛇行させ、川の周辺に池や湿地を配置することで、トキの餌生物の多様化と個体数の増加を図ろうというものである。

一方で、この取組により創出される水辺は約1.2ヘクタールとなり、トキの餌場として持続可能なものとしていくためには、通常必要となる河川管理（草刈り）では不十分となることから、地域住民等を巻き込んだ“新たな維持管理の枠組みづくり”が課題となっている。



自然再生事業箇所
(赤枠内が事業用地)

2. 活動の目的

佐渡地域整備部では、上記の課題に対し、官民協働して維持管理に取り組むことを目指し、『地域住民－企業－河川管理者（県）』のパートナーシップによる新たな枠組みづくりのため、地域の住民や団体の代表者等と話し合いを続けているところである。

新たな水辺を維持管理していくうえで目下の大きな課題となっているのが、“地域住民をいかにして維持管理に巻き込んでいくか？”（地域住民と河川管理者のパートナーシップをいかに築くか）、“地域住民を維持管理に巻き込めたととしても、必要となる（河川維持管理費以外の）資金をどのように調達するか？”（企業と地域住民のパートナーシップをいかに築くか）という点である。地域住民の参加を促していくには、島外の大学生を草刈りボランティアとして受け入れることや、ヤギ・ひつじなどの草刈り動物の活用、高効率な草刈り機械の導入など、地域に不足しているマンパワー

を補い、住民にとって重労働とならないことが絶対条件となる。

また、この様な新たな維持管理の枠組みづくりを行い、組織として活動していくためには、草刈り機材の導入や燃料費等諸々の費用が必要となってくるため、「トキの野生復帰」、「生物多様性」、「子供たちの自然・環境学習の場づくり」等に共感していただける企業を探し、CSR活動の一環として参加を募りたいと考えている。

そこで、本活動は、当事業が抱える様々な課題のうち、次の3点の解決のヒントをつかむ事を目標とする。



地域の皆さんとの座談会
トキ交流会館 (H28. 5. 31)

■新たな維持管理の枠組みづくりを行ううえでの具体の課題と助成金を活用した活動内容

課題①：新たな維持管理組織の活動資金の確保
活動内容：「自治体総合フェア」において天王川の取組をPRすると共に、企業CSR対象となり得るか情報収集を行う。
課題②：ヤギ・ひつじなどの草刈り動物の飼い主の確保
活動内容：社会実験として、短期間ひつじを借り受け、地域住民から飼育をしてもらうことで、ひつじの導入の可能性を探る。
課題③：地域住民・企業と協働した河川管理のあり方の検討
活動内容：地域自ら河川管理を行っている先進事例を新穂地区の住民と共に視察し、天王川における維持管理活動の参考とする。

3. 活動の内容

(1) 課題①『新たな維持管理組織の活動資金の確保』に関する活動

1) 目的

経済産業省の定義によると、「CSR (Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任) とは、企業が社会や環境と共存し、持続可能な成長を図るため、その活動の影響について責任をとる企業行動であり、企業を取り巻く様々なステークホルダーからの信頼を得るための企業のあり方を指す」としている。

この考えに基づき、多くの企業が、「環境」、「福祉」、「文化」、「教育」、「社会貢献」など組織理念に合致した分野へ関わりをもち、助成金などを支出している。

天王川の自然再生では、トキの野生復帰の支援、水循環、生物多様性、子供たちの野外学習の場づくりなど、環境や教育に関連する取組であることから、少しでも多くの企業にこの取組を知ってもらい、興味を持ってもらうことがCSRによる資金提供の近道であると考えている。

そこで、この研究助成金を活用し、『第20回 自治体総合フェア2106』にブースを出展し、来場される企業の方々に天王川の自然再生の取組をPRすることとした。

2) 具体の活動

「第20回 自治体総合フェア」にブースを出展し、来場される企業の方々に天王川での自然再生の取組をPRするとともに、自然再生を通じて、「生物多様性」や「子供たちの野外学習の場」、「ボランティアの場」づくりへの企業CSRの提案を行った。

■日時：平成28年5月18日(水)～20日(金) 10:00～17:00

■会場：東京ビッグサイト 西展示棟 西4ホール

■活動：①ブースでの展示及び来訪者へのPR

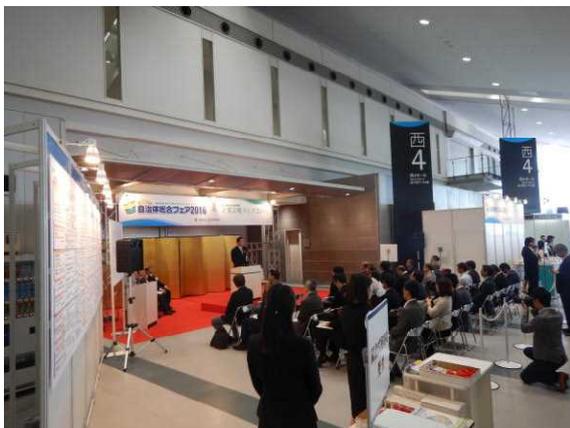
- ・天王川自然再生事業の概要説明パネル表示
- ・CSRによる参加の案内
- ・整備イメージ模型(1/200スケール)の展示

②自治体総合フェア2016のホームページにおいて当ブースの見どころを紹介

(http://www.noma.or.jp/lgf/2016/list/index_midokoro.html#L-68)

③本活動のプレスリリース

④佐渡地域振興局ホームページでの紹介



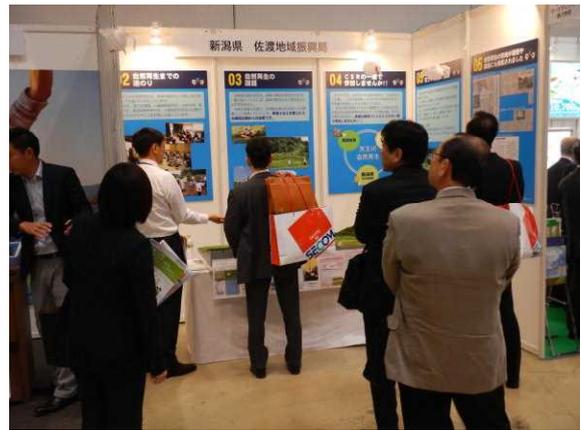
自治体総合フェア2016開会式



新潟県 佐渡地域振興局のブース



当ブースの来訪者への説明の様子



多くの方に来訪していただきました

3) 所見

3日間の開催期間を通じ、会場には11,515名の来場者(主催者発表)があり、その内、当ブースには、地方議員・自治体関係者・大学関係者・民間企業社員・社団/財団法人関係者・マスコミ関係者など、多様な組織の方々約100名に来訪いただき、説明及び名刺交換を行うことができた。中には、大手のIT、通信、出版、製造、建設などの企業の方もみえられ話を聞いていただいた。

また、新潟県や佐渡出身で首都圏で活躍されている企業の方々も多く立ち寄っていただいた。

来訪者との話のなかでいただいたアドバイスとしては、「マスコミにうまく取り上げてもらうことが大事。その戦略を練るべきだ。」とか、地域住民を巻き込む手法の1つとして、「地元の子供たちと一緒に鳥の巣箱を設置することで、巣箱の様子を見に来る子供たちをきっかけとして事業エリアに人を呼び込んだ成功例」等の経験を聞くことができた。

また、資金を必要とする個人や組織がインターネットを通じて不特定多数の人に財源の提供や協力などを呼びかけ、その活動に共感した人から財政的支援を受ける「クラウドファンディング」により、維持管理費の確保が可能ではないかとのアドバイスをいただいた。

クラウドファンディングは、トキの野生復帰を支援する離島での取組であることが、出資者にはプラスに感じてもらえることから、十分にチャレンジする価値があるものとして可能性を探ってみることにしたい。

さらに、各企業・団体のCSRや環境部門の担当者が多く来場する『エコプロ』に参加することでより多くの人にこの取組を知ってもらえるだけでなく、CSRの対象として興味を持ってもらえる可能性があるるので参加を検討すべきだとのアドバイスもいただいた。

(2) 課題②『ヤギ・ひつじなどの草刈り動物の飼い主の確保』に関する活動(その1)

1) 目的

天王川を自然再生した後、この事業地がトキの餌場となるためには草刈りなどの維持管理が必須となる。維持管理は、河川管理者である県はもちろんのこと、地域住民も巻き込んでいきたいと考えているが、当地域は高齢化が進むなど、マンパワー不足が顕著なため、学生ボランティアの他にヤギやひつじなどの草刈り動物の導入を検討している。

しかし、ヤギやひつじは飼育にどれほどの手間がかかるか分からないなかで、安易に飼う住民はいないことから、実際にひつじを短期間飼育してもらい、その手間や楽しさなどを経験し、本格導入へ道筋をつけようという試みである。

この助成金による活動としては、

- ①ひつじを活用している地域の先進的な取組の視察(滋賀県)
- ②短期間、ひつじを地元で飼育してもらい、その苦労や楽しさを経験してもらう取組 の2つを行った。

2) 具体の活動

滋賀県において、ひつじを使った活動をしている「池之脇自治会」及び「ローザンベリー多和田」という2つの団体を新穂潟上地区の住民2名と共に視察を行い、先進的な取組について相手団体の方々と意見交換を行った。

ただし、この活動については別途費(土木部の政策推進費)による支出を兼ねたものとなっている。

■池之脇自治会

日時：平成28年8月31日(水)11:15~12:30

場所：滋賀県東近江市

活動：池之脇自治会 寺田環境整備委員長ほか4名との意見交換及び現場視察

同行者：板垣 徹氏(天王川自然再生WG座長)

後藤勇典氏(アイマーク環境(株)社長兼CEO)

■ローザンベリー多和田

日時：平成28年9月1日(木)10:00~12:30

場所：滋賀県米原市

活動：ローザンベリー多和田 三瀬総支配人ほか3名との意見交換及び現場視察

同行者：板垣 徹氏(天王川自然再生WG座長)

後藤勇典氏(アイマーク環境(株)社長兼CEO)

3) 主な聞き取り内容

■ 池之脇自治会

池之脇自治会は、害獣(猿・鹿)対策として、里山と里地の境界付近にひつじを放牧(に近い)している。

ひつじがいることで害獣が里に近づきにくくなるうえ、草がなくなることで清潔となり、猿などが隠れる場所がなくなることから害獣被害が減るとのこと。

地区の土地を民間業者にソーラー発電用地として有料で貸し出し、その用地の雑草をひつじが食べることで発電効率を落とさない工夫をしている。また、日差しの強い日や雨の日は、ひつじがソーラーパネルを屋根に見立てて休むなど、Win-Winの関係が保たれている。

25世帯が当番で世話をしているが、配合飼料を与えるのと柵が壊れていないかを確認するだけなので1日10分程度と住民の大きな負担にはなっていないとのこと。



現場で説明を受けている様子



ソーラーパネルの下で休憩中のひつじ

費用は、24頭で1.8万円/月程で市役所から補助も受けている。

雨・雪・寒さにはかなり強いが暑さには若干弱い感じがする。上の歯がないので噛まれても大きなケガにはならず、ヤギのように気性が荒くないので飼う手間はそれほど大変ではない。



地区の集会所での質疑応答の様子



環境整備委員長の寺田さんからの説明

ひつじは、最初に狭い範囲で囲い飼いとすると、そこが安全な場所と認識して戻ってくるようになる。

もともと害獣対策なので、羊毛を有効に活用して小金を稼ごうなどというつもりはなく、そのような活動をする予定もないとのこと。



いただいた資料



ひつじの毛で製作した人形

■ ローザンベリー多和田

地元の建設会社社長が半分道楽で整備した施設であるが、イングリッシュガーデンや様々な体験施設があり、ひつじの放牧も行っている。

飼育密度は5～6頭/2反で夏場でも特に異臭はない。去勢することでおとなしくなり、川の法面部などにも降りて草を食べるので水辺が嫌いという印象はないとのこと。

ケガをしてもヨードチンキを塗るとほとんど治るが、病気になると診察料や薬代で2万円/頭となるので無理して延命していない。

羊毛は、20頭程度の量では買い取ってくれるところはない。今は、多くを廃棄処分しているが一部は福祉施設へ無償で提供し、福祉施設で洗浄・染色したものを安く買い入れ、施設内で有料のぬいぐるみストラップづくり体験コーナーを設置している。

また、ひつじ柵の脇に餌(牧草)をガチャガチャで有料販売する予定とのことと餌販売にも付加価値を付けようとしていた。



支配人より施設全体の説明を受ける様子



ひつじ牧場 (右: 板垣座長、左: 後藤社長)



飼育担当者との質疑応答



川沿いの法面をひつじが草を食べた後



染色した羊毛（ストラップ製作の材料）



羊毛で製作したストラップの見本

4) 所見

ひつじを活用している2箇所とも、その草刈り効果は相当に高いという評価であった。

滋賀県では県畜産技術振興センターでひつじを販売・無料レンタルをしており、本県よりも活用のベースがしっかりしている。

池之脇自治会は環境整備委員長の寺田さん（元市役所職員）がリーダーとなって「この集落はひとつの家族」という合い言葉の元、地域をまとめ、皆で力を合わせてひつじの管理をしているというのが印象的であった。地域がひとつになるにあたり、リーダーの存在と「害獣対策」という地域住民共通の問題意識があるという点がこの地域の活動の源である。

ひつじはめったに病気をせず、ケガもヨードチンキですぐに治るとのことで扱いやすいという印象を受けたが、一方で、羊毛の活用がかなり難しいとのことで、羊毛による付加価値づくりはそう簡単ではないのが残念である。

2箇所とも無心で草を食むひつじは印象的で、天王川周辺でも上手く活用できたら地域の労力の軽減に繋がることから、高田農業高校からのレンタルによる試験飼育の試みと併せ、検討を進めていく。

(3) 課題②『ヤギ・ひつじなどの草刈り動物の飼い主の確保』に関する活動(その2)

1) 具体の活動

県立高田農業高校が所有しているひつじ2頭(いずれもオス)を約1ヶ月間、無償で佐渡地域整備部が借り受け、それをアイマーク環境(株)に無償で飼育を委託する。アイマーク環境(株)は、経営している新穂潟上温泉においてマスコミ的に来場者に触れさせるとともに新穂地区数ヶ所で雑草の草食効果を確認する。

■日時 : 平成28年9月11日(日)~10月4日(火)

■場所 : 佐渡市新穂地区

- 活動 : ①ひつじの運搬
②高田農業高校 高橋先生による飼育指導
③飼育委託
④本活動のプレスリリース
⑤佐渡地域振興局ホームページでの紹介



事前準備としてハウスを組み立て



柵(アイマーク(株)さんが購入)を設置



ひつじ到着前にハウスを設置(新穂潟上温泉)



佐渡に到着直後のひつじたち

2) 所見

9月15日(木)に地元の保育園児約20名を招き、『ひつじさん、佐渡健康大使就任式』を開催し、多くのマスコミに取材(テレビ新潟、U Xの夕方のニュースで報道されたほか、新潟日報でも紹介)され、

記者からは「1ヶ月間限定の試みではもったいない」との声も聞かれた。

休日、湯上温泉に行くと家族連れでひつじを見に来ている人たちも多く、延べ人数としてはかなりの数になったと思われる。



園児を招いての歓迎式の様子



多くのマスコミの方に取材していただきました



河川の管理用通路で草を食むひつじ



ハウス周辺の雑草も黙々と食べています

以下、今回の社会実験で確認したかったことについての所見

①ひつじの草刈り効果の確認

右の写真は、ひつじが来て3日後の様子。柵を隔てて左側はひつじがいた場所。右側はいなかった場所で、ひつじの草刈り効果がかなり明確にわかる。

ただし、一見して美味しそうなお雑草でも見向きもしない場合もあり、好きな草がなくなると仕方なく嫌いな草でも食べるという感じで、ひつじも好き嫌いがあることが分かった。

特に、今回借りた2頭のひつじは高齢(5歳と7歳)であるため、滋賀県の先進地で見えてきたひつじに比べ食の細さはあったように思う。



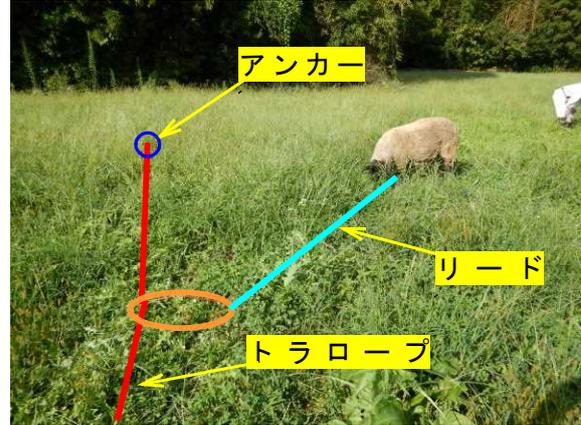
ひつじが来て3日後の様子

②アンカー固定でひつじが逃げないで草を食み続けるかの確認

地盤の堅さにもよるが、2本のアンカーにトラロープを渡して、そ

ここにリードを付けるという方法ではアンカーは抜けることはなかった。しかし、リード（犬用）部分が壊れたことがあり、リードはなるべく単純な構造（単なる紐）が望ましいと感じた。

自分の周りに美味しい草がなくなると、より遠くに行こうとするのでひつじ周辺の草の状況も確認しておく必要がある。



アンカー、トラロープ、リードの組み合わせで動ける範囲の草を食んでいる様子

③飼育手間について

今回の社会実験ではアイマーク環境（株）から無償で飼育をしていただいた。

主な用務としては、「ひつじの移動」、「糞の始末」、「水やり」などであるが、やはり草場への移動に手間がかかる。

ひつじの草食能力が高ければ高いほど多くの草場が必要となるのでそこまでの移動に最低2名の人員と軽トラック、ひつじを入れる檻が必要となり、この点は本格導入に向けて最大の課題となる。



草場への移動の様子

④ひつじの性格について

飼育の手間がどの程度か確認するうえでひつじの性格はとても重要な要素となる。一般的に、ひつじはヤギよりも性格が穏やかだと言われており、それが今回の社会実験でひつじを導入する理由となっている。

今回、高田農業高校から借り受けた2頭は、5歳と7歳のオスで、人間でいえば老齢であったことや去勢されていたことから、性格的



大人の男性にはあまり頭突きはしない

には大人しく、犬などと同じで頭や顔を撫でてやると気持ちよさそうにしていた一方で、女性や子供に対しては、上下関係の意識が強いようで、頭突きをしようとするなどやんちゃな面も見せた。

ヤギ同様、2頭以上で群れをつくるので、1頭だけ連れ出そうとするとパニックのようになり、人ひとりでは対応できない力を発揮するところが分かった。

⑤客寄せ効果について

今回は、新穂瀧上温泉の駐車場入口付近にハウスを建てて飼育したが、休日は親子連れの見学者が多く訪れ、写真を撮ったり、雑草をやったりしていた。

佐渡にはヤギはいるものの、ひつじはいないので、物珍しさも手伝って温泉のマスコットして十分な効果があった。

佐渡から去る際には残念がる人たちもいて、短い間ながら十分な存在感があったように思う。

(4) 課題③『地域住民・企業と協働した河川管理のあり方の検討』に関する活動(その1)

1) 目的

地域の住民や団体の代表者と共に組織している「天王川の自然再生に関するワーキング・グループ」で大きな課題となっているのが、新たな水辺の管理にいかにして多くの住民や団体に参加してもらうか? という点である。

新穂の住民は、農地や屋敷回りの草刈りを日常的に行っているなかで、さらに水辺の草刈りまで担ってもらうにはそれなりのモチベーションが必要となる。

全国的には、地域自ら河川管理に積極的に関わりすることで、地域の課題を克服しているところもあり、そのような先進的な取組をしている団体を新穂の住民(2名)と共に視察し、天王川の維持管理組織枠組みづくりに生かしたいというものである。

2) 具体の活動

滋賀県では、かつて琵琶湖の水質汚染が大きな問題となったことから、県民の水環境への意識が高く、河川敷の草刈りやゴミ拾いなどに地域自ら取り組んでいる組織がある。今回は、新穂瀧上地区の住民2名と共に「白鳥川の景観を良くする会」と「竜王清流会」という滋賀県を代表する2団体を視察し、相手団体の方々と意見交換を行った。

ただし、この活動については別途費(土木部の政策推進費)による支出を兼ねたものとなっている。

■白鳥川の景観を良くする会

日 時 : 平成28年 8 月 31 日 (水) 14 : 30 ~ 17 : 00

場 所 : 滋賀県近江八幡市

活 動 : 白鳥川の景観を良くする会 吉田代表ほか 7 名との意見交換及び現場視察

同行者 : 板垣 徹氏 (天王川自然再生WG 座長)

後藤勇典氏 (アイマーク環境(株) 社長兼CEO)

■竜王清流会

日 時 : 平成28年 9 月 1 日 (木) 14 : 00 ~ 17 : 15

場 所 : 滋賀県蒲生郡竜王町

活 動 : 竜王清流会 長江会長ほか 5 名との意見交換及び現場視察

同行者 : 板垣 徹氏 (天王川自然再生WG 座長)

後藤勇典氏 (アイマーク環境(株) 社長兼CEO)

3) 主な聞き取り内容

■白鳥川の景観を良くする会

この会は、近江八幡市内の定年退職者が中心となって「地域に何か恩返ししたい」との思いから友人・知人に呼びかけ発足した会で、琵琶湖にそそぐ一級河川白鳥川の環境整備(除草・ゴミ拾い)を中心に活動している。

「健康づくり」、「生きがいくづくり」、「仲間づくり」の3づくりを合い言葉に白鳥川の約5km区間の美化活動に会員65名で取り組んでおり、住民が地域貢献のために自ら組織づくりして活動している。

毎月3回活動しており、運営費は企業や財団の助成金に応募して確保しているものと県の河川愛護費がベースであるが安定した資金がないことが課題とのこと。

また、退職者の集まりなので体力的な問題があり、年平均5名の入会がある一方で退会者も多いこと、また若い人の入会が少ないのがもう一つの課題である。

祭の際に河川沿いの桜並木に設置するぼんぼりに企業広告を募って資金(1つのぼんぼりに対し1,000円)を得る営業活動もしており、営業、電気、塗装など、各々の会員が現役時代の経験を活かし、会を支えているとの説明を受けた。

白鳥川に架かる農道橋に背番号を振るなど、美化活動の効率化のためのアイデアなども出し合いながら取り組んでいる。

リーダーである元市職員の吉田代表の人柄で周りが動いているとの説明を受けたが、新入会員にも会の重要な仕事を預けるなど、人材づくりもしっかりと行っていた。



「白鳥川の景観を良くする会」の皆さんとの
意見交換



パワーポイントで説明を受けました



資材置場はとても整理整頓されてい
ました。



現場にて吉田代表より説明を受けました

■ 竜王清流会

この会は、町内の善光寺川沿いに大型アウトレットパークが進出することになったことをきっかけに、善光寺川の美化活動を始めた団体である。

この会も白鳥川の景観を良くする会同様、地域自らが立ち上がり、数百人規模で草刈りやゴミ拾いを行っている例として視察を行った。

運営費は、企業の助成金と県の河川愛護補助金がベースであるが地元建設業（2～3社）のボランティア精神に支えられているところも大きいとのことだった。

助成金で買った草刈り用の大型重機や乗用式の草刈り機などを有しており、草刈りの効率化、省力化にも取り組んでいる。

子供向けの魚つかみイベントを行ったり、女性陣が活動日に流しそうめんや豚汁などを振る舞ったりすることで河川管理活動の価値を高めており、そのような活動が「いい川・いい川づくりワークショップ」で“地域力を高めるのは中高年で賞”に輝いているとのことだった。

後継者不足が大きな課題で、青少年世代の関心を引きつけたいとのことだった。

リーダーの長江会長は女性であるが、一見政治家のような存在感があり、強いリーダーシップを感じた。

活動日に数百人を集める秘訣は「人情（あの人に頼まれたら断れない）」と説明されたが、それがこの町の人間性と言われたらそれ以上質問しようがなかった。



「竜王清流会」長江会長のあいさつ



竜王清流会が管理している善光寺川



現場にて管理に関する説明を受けました



河床状況を確認している様子



会所有の大型重機なども見せてもらい、説明を受けました



4) 所見

どちらの会も高齢者が中心となって、自ら組織を立ち上げ、継続的に活動しているという点で非常に参考となる事例であった。

いずれも我々のために集まってくれた人は楽しそうに受け答えして

くれ、やりがいを感じていることが伝わってきた。

県から河川愛護補助金を受けているとはいえ、不足する資金を企業や財団の助成を受けるため企画書を作り応募するに当たっては、会員に様々な経験者がいることが強みとなる。

また、両団体とも強いリーダーシップで会員を引っ張るリーダーがいることが特徴的で、そのリーダーを中心に多くの参加者を募り、地域貢献することの喜びを共有し、次回の活動のモチベーションにしているところが素晴らしい。

滋賀県は琵琶湖の汚染を経験し、長い時間をかけて水環境に関する教育を県をあげて行っていることが地域住民の河川管理の意識の高さにつながっているとのことだったが、自ら課題解決に動くのは関西人の気質のようなものも大いにプラスに働いていると感じる。

川がキレイになったと言われるのがやりがいにつながるという話を聞いたが、活動の際には参加者全員で毎回集合写真を撮ったり、参加者に豚汁などを振る舞ったり、活動に付加価値を加えることも継続する手法として見習うべきものと感じた。

休みを取ってまで私たちに長時間付き合ってくれて現場案内や質疑応答に応じてくれた方もいて、両団体の活動に対する誇りを感じさせられる視察であった。

(5) 課題③『地域住民・企業と協働した河川管理のあり方の検討』に関する活動(その2)

1) 目的

天王川では、トキの餌場となる水辺の一部として湿地を造ることとしているが、天王川自然再生ワーキング・グループでは湿地の維持管理のあり方が課題となっている。

湿地は機械による草刈りが難しく、手間もかかることから葦などが繁茂し、手が付けられなくなる可能性が高く、その対応についての研究が必要である。

そこで、トキと同じく湿地で餌を採るコウノトリの郷である豊岡市を訪ね、湿地やビオトープの管理について情報収集するものである。

2) 具体の活動

豊岡市では、コウノトリの郷公園で市のコウノトリ共生部職員より、湿地やビオトープの維持管理の取組について話を聞き、ハチゴロウの戸島湿地では、その維持管理に携わっているコウノトリ湿地ネットの代表者より現場を案内してもらいながら企業CSRでの取組などについて伺った。

■コウノトリの郷公園

日 時 : 平成28年 9 月 2 日 (金) 11 : 00 ~ 13 : 00

場 所 : 兵庫県豊岡市

活 動 : 豊岡市コウノトリ共生部 成田係長、豊岡市コウノトリ文化館 高橋副館長との意見交換

同行者 : 板垣 徹氏 (天王川自然再生WG 座長)

後藤勇典氏 (アイマーク環境(株) 社長兼CEO)

■ハチゴロウの戸島湿地

日 時 : 平成28年 9 月 2 日 (金) 13 : 30 ~ 15 : 30

場 所 : 兵庫県豊岡市

活 動 : コウノトリ湿地ネット 佐竹代表との意見交換及び現場視察

同行者 : 板垣 徹氏 (天王川自然再生WG 座長)

後藤勇典氏 (アイマーク環境(株) 社長兼CEO)

3) 主な聞き取り内容

■コウノトリの郷公園

豊岡市では市内で29箇所でのビオトープ整備を目標としているなか、現在は16箇所が整備済で、その管理は市が仕様書を作成し細かく指示している。

ビオトープ管理士の資格を持った管理員が個々のビオトープをまわり、その地域にあったアドバイスをしているとのこと。

維持管理費は市が支出しており、コウノトリ基金(1,200万円)とふるさと納税(1,000万円)が主な原資となっているが、ダノンや伊藤園、JXホールディングス(ENEOS)などから企業CSRの助成金を受けているほか、労働によるCSRも受け入れている。

ビオトープだけをつくって、維持管理を地域に任せるのは押しつけ感が強く難しいので、国交省から維持管理費を得る意味で河川協力団体を目指す考えもあるとのことであった。



コウノトリ文化館の高橋副館長より、コウノトリの野生復帰までのプロセスや課題などについて説明を受けました

コウノトリの野生復帰では、生物多様性という目的に合致するならば見た目の自然さにこだわらず、多少人工的な取組を行っており、これからの天王川の取組に参考となった。



豊岡市コウノトリ共生部の成田係長との
意見交換の様子



管内のディスプレイ

■ハチゴロウの戸島湿地

コウノトリは水際部で採餌するので、大きな区画の湿地ではなく水際部が多くなるように小さな区画の湿地を多く造り、浅い場所、深い場所など変化をつけ、湿地を単独で考えるのではなく山林など周辺との連続性を重要視しているとのこと。

湿地の草刈り頻度は4～10月で月2回ペースで湿地ネットの職員1名とシルバー人材3名(7,000円/日・人)の4名の体制で行っている。

企業CSRは現場作業として受け入れているが素人には危険な作業もあるので必ず監督員を同行させている。基本的に一般の方々による草刈りは募集していないとのことであった。

草刈りはしっかり刈り込むのではなく“適当に刈る”ことを意識している。当初は草刈りを行う区間と行わない区間など試行錯誤していたが、全体を適当に刈ることが良いことが分かってきたとのこと。

刈った草は肥料として利用したり、葦などは燃料用の木質チップに利用する取組も行っている。



管理棟において「コウノトリ湿地ネット」の佐竹代表より説明を受ける様子

マスコミに取り上げられたり、表彰されることで維持管理のモチベーションが保たれる。

コウノトリ湿地ネットは指定管理者として市から委託費として年間112万円を受けているとのことで管理棟にも常駐職員がいるなど佐渡ではない取組ができていた。



ハチゴロウの戸島湿地の現場の様子



現場にて草刈り作業員から話しを聞く様子



設備について話しを聞く様子



現場の説明看板



コウノトリの巣

4) 所見

コウノトリの湿地管理では大手企業からCSRの資金と労働力の提供を受けながらうまく進めていた。

佐渡市では考えられない広大な湿地を地道に管理している姿を見て、

これをエンドレスで続けていくことには気が遠くなるような思いであった。

湿地の草刈りについても試行錯誤を繰り返し、手間と効果のバランスのなかで最適な形を模索する点など見習うべきところは多い。

4. 活動の総括

天王川の自然再生は、『2. 活動の目的』で示した①～③のような、整備後の維持管理に関わる課題があるなかで住民との話し合いを続けている。

今回、この助成金により「自治体総合フェア2016」に参加することで、維持管理の資金集めの手法としてクラウドファンディングの情報をいただいたり、民間企業の方よりマスコミに取り上げられることの重要性を教えていただいた。

また、二人の地域住民と共に、地域自らが河川の維持管理に頑張っている事例として、「白鳥川の景観を守る会」や「竜王清流会」を訪ね、直接話を聞き、広大な範囲の草刈りを担っている姿を見て、リーダーの存在や活動の付加価値づくりの重要性などについて学ぶとともに、佐渡での活動の動機付けに繋がったと考えている。

さらに、人口減少と高齢化で不足しているマンパワーを草刈り動物で補おうという試みとして「池之脇自治会」と「ローザンベリー多和田」を視察し、ひつじの活用のあり方を見聞きし、実際に県立高田農業高校からひつじを借り受けることで短期間ではあるものの、地元で飼育してもらう社会実験ができたことは私どもにとっても、地元住民にとっても極めて貴重な経験であった。

今回の活動では、課題を克服するうえでの様々なヒントを得ることができたうえに、自治体総合フェア2016では(一社)日本CSR協会の前田代表理事と出会え、CSR活動について相談にのっていただけることになったり、白鳥川の景観を守る会の吉田代表、竜王清流会の長江会長などと知り合いになれたことで、今後、これらの方々を私どものワーキング・グループに講師として招くなど、今回の活動を来年度以降も生かしていくことで課題の解決につなげていきたい。